

します。天下の台所・大阪への期待の大さがつかがえます。

川口には運上所(税関)と渡止場があり、運上所の外事務判事には五代友厚が就任(初代大阪税関長)。1870(明治3)年には、関西で初めて川口から神戸まで電信線(40km)が開通し、運上所内に電信局が開設されます。また1871(明治4)年に造幣局が創業すると、川口に英國東洋銀行の支店を置き、造幣局から川口まで貨幣搬送用の馬車鉄道も開通。貿易発展を見込んだインフラが整っています。

外国商人が滞在するホテルも難居地に開業。開市後すぐオープンした梅本町の「自由亭ホテル」の近くにはもともと天満宮の御旅所がありました。ところが牛を天満天神の使いとする天満宮には抵抗があったのでしょう。御旅所は1872(明治5)年に松島花園町に移転したという逸話も残ります。

貿易からキリスト教と教育の街へ

しかし、外国商人たちの期待はまもなく裏切られることになります。まず、川底の浅い安治川に面した渡止場は、外国の大型船の着岸には適していなかったのです。神戸港は大型船のまま着岸できることに、川口の渡止場へは天保山沖で大型船から小船に荷物を積み替え運ばなければならないこともしばしば

あって非常に不便。また、江戸時代からの大坂商人の秩序を守るために五代友厚は外国商人の不正取引を厳しく取り締まる一方、古い商慣習のない神戸の伊藤博文(初代兵庫県知事)は寛大だったとも言われています。

さらに1874(明治7)年、大阪・神戸間の鉄道が開通し、神戸港で荷揚げして鉄道で大阪へ運べるようになると、ほとんどの外国商人は「川口にいても商売にならない」と川口を去り、神戸に移ってしまいます。川口居留地は明治8年ごろには、一時、寂しい街になっていました。

代わって川口居留地にやつて来たのが、キリスト教各派の宣教師たちでした。1873(明治6)年、切支丹高札の撤去を機に次々に来日。川口に住んで伝道を始めます。1882(明治15)年になると、現在も川口にある川口基督教会の前身である聖テモテ教会が建てられます。同時に、宣教師たちは当時遅れていた初等教育や女子教育の必要性を訴え、三一小学校(現・桃山学院)やウヰルミナ女学院(現・大阪女学院)などを設立。平安女学校、ブール学院なども川口が発祥です。

1886(明治19)年には、宣教師たちの要望で居留地は新たに10区画拡張。洋館が立ち並び、教会からはオルガンの音が聞こえるなど、異国情緒漂う街になりました。道路には街灯が設置され、ユーリカリやゴムの街路樹も植えられていました。また、パン、牛乳、ポン水(ラム

ネ)、洋服、サッカーなど西洋人の生活文化が川口居留地から発信されていきました。同時に、クリーニング店、理髪店など多くの外人によって運営される商店も開業していました。

居留地に住む外国人たちは、「居留地会議」という自治組織を持ち、自治行政を行っていました。独自の警察や消防隊も組織。同時に、会議を開催して快適な生

活を送れるよう協議しました。街灯の設置や消防のポンプを購入するかどうかなど、会議の詳細を記載した議事録もすべて残っており、丁寧に読むと当時の外国人たちの暮らしを見えてきます。

さて、1899(明治32)年、条約改正により、日本の居留地はすべて廃止となります。川口居留地も31年間の歴史に幕を下ろし、大阪市西区に編入されます。

庄厳な空気が漂う、川口基督教会の礼拝堂。現在の礼拝堂は1920(大正9)年に建設されたもの。1995(平成7)年の阪神・淡路大震災で全壊後、復元された。



1874(明治7)年、川口居留地の東側対岸の江之子島に建てられた「大阪府庁舎」から見た川口居留地。庁舎は、大阪が世界に門戸を開く意思を示すように、川口居留地の西側を正面玄関とした。高さ30m、2階建ての立派な西洋建築でした。

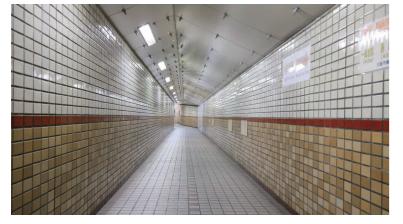


「大阪の文明開化は、川口居留地と造幣局から始まったと言われます。造幣局はレンガや硫酸など工業製品を通じて、近代化を進める技術を発信。また当時、大阪市の西のはずれだった川口居留地からは西洋の生活文化が発信されました。聖バルナバ病院も川口が発祥です」と桃山学院史料室の西口忠さん(右)と玉置栄二さん(左)。

居留地廃止と前後するように、山東省をはじめとする北方系の中国人商人が川口に入ってきた。彼らは欧米人に雇われた中国人と違い、いわばエリート出身の中国商人です。川口華商と呼ばれ、大阪における中国貿易において大きな取引を担い大活躍します。当時、川口には北方系の中国人による中國料理店もいくつもありました。「なぜ川口居留地に、中華街はないの?」と聞かれることがあります。中華街を構成するのは広東省など南方系の中国人です。また、北方系の川

口華商は戦争が深刻化すると、あっさり帰国します。川口居留地は他の居留地ともあり方が異なるうえ、面影が残っていないことがあります。それだけに今後の研究対象としておもしろい場所だとも言えますね。

川口居留地は他の居留地ともあり方が異なるうえ、面影が残っていないことがあります。それだけに今後の研究対象としておもしろい場所だとも言えますね。



★安治川隧道

安治川の河底を横断し、大阪市此花区と西区を結ぶ延長80.6mの歩行者・自転車専用トンネル。かつてこの地にあった渡し船に代わる交通手段として、昭和19年に完成。開設当初は自動車専用のトンネルもあった。しかし、国道43号線安治川大橋の開通などによって、昭和52年、車両の通行は中止に。現在は幅員2.4mの歩行者・自転車用通路のみ供用されている。



★安治川水門・尻無川水門

安治川水門は、昭和45年に竣工した日本初アーチ型の水門。台風などによる高潮の被害から大阪地域を守るために設置されています。いざというとき、約30分で径間57mの赤いアーチ型の鋼製ゲートが上流側に倒れることで水門を閉鎖。大阪湾からの高潮をせき止めます。

尻無川水門は、甚兵衛渡船場のすぐ北にあるアーチ型の水門。安治川水門同様、径間57mの青いアーチ型の鋼製ゲートが高潮をせき止めている動きを担う。



★八幡屋公園

広々とした芝生広場と大規模競技場に対応できる体育館(丸善インテックアリーナ大阪)。冬季にはスケートリンクになるプール(丸善インテック大阪プール)が一体化した総合公園。園内には、ウォーキングコース、遊具広場、多目的広場などもあるほか、体育館の屋根全体が樹木や芝生でおおわれており、頂上からは眼下にパノラマが展開する。春には桜やツツジ、夏にはジャカルダやヒマワリ、秋には紅葉、冬にはスイセンなどが楽しめ、四季を通じて市民の憩いの場として賑わっている。

★大坂船手会所跡の碑

江戸時代、西國から大坂に入る船を監視する船番所(大坂船手とは船の出入りを管理・掌握する江戸幕府の役職)がありました。このあたりが川口居留地の中心エリアとなる。



★川口運上所跡

安治川向こうに大阪市中央卸売市場を臨む位置に、かつて運上所(税関)がありました。現在は、「大阪開港の地の碑」「大阪電信発祥の地の碑」も並ぶ。河口で大型船から小型船に荷を積み替え、安治川を4.5kmさかのぼった後の運上所での手続きは、外国人たちに不便を強いた。



★甚兵衛渡船場
尻無川の河口近く、大正区泉尾七丁目と港区福崎一丁目の岸壁間94m結ぶ渡し船。現在でも、学生をはじめ市民の生活の足として活躍している。大阪市の渡船で利用者が一番多く、朝のラッシュ時は2隻の船が運航している。また「摺津名所図会大成」によると、江戸時代、甚兵衛渡の小屋は「蛤小屋」とも呼ばれ、名物のしじみやはまぐりを販賣する人が絶えなかったという。

★京セラドーム大阪

「大阪ドーム」として平成9年にオープン。施設命名権(ネーミングライツ)の売却で、平成18年「京セラドーム大阪」に。オリックス・パフォーマンスの本拠地であり、野球はもちろん、コンサートやイベントの開催など、幅広く利用されている。アリーナ最大収容人数は5万5000人。ドームの内側や選手の練習風景を間近で見られる「ドームツアーセンターアリーナ」も実施している。(有料。実施日は要確認)